

明治三十二年頃

寺田寅彦

青空文庫

明治三十二年に東京へ出て来たときに夏目先生の紹介ではじめて正岡子規しきの家へ遊びに行つた。それとほとんど同時に『ホトトギス』という雑誌の予約購読者になつたのであつたが、あの頃の『ホトトギス』はあの頃の自分にとっては実にこの上もなく面白い雑誌であつた。先ず第一に表紙の図案が綺麗で目新しく、俳味があつてしかも古臭くないものであつた。不折ふせつ、黙語もくご、外面諸画伯の挿画や裏絵がまたそれぞれに顕著な個性のある新鮮な活気のあるものであつた。現在のようなジャーナリズム全盛時代ではおそらく大多数のこうした種類の挿画や裏絵は執筆画家の日常の職業意識の下に制作されたものであろうと思ふが、あの頃の『ホトトギス』の上記の画家のものはいかにも自分で楽しみながら描いたものだろうという気のするものばかりである。どうしてそんな気がするか分らない。一つにはこれらの画家が子規と特別な親交があつて、そうしてこの病友を慰めてやりたいという友情が籠つていたであらうし、また一つには当時他に類のなかつたオリジナルでフレッシな雑誌の体裁を創成するということに対する純粋な芸術的な興味も多分に加わつていたために、おのずから実際に新鮮な活気が溢れていたのでないかとも思われる。こうした活気はすべてのものの勃興時代にのみ見らるるものであつて、一度隆盛期を通り越すと消

えてしまう。これはどうにも仕様のないものである。

たしか浅井和田両画伯の合作であったかと思うがフランスのグレーの田舎へ絵をかきに行った日記のようなものなども実に清新な薫りの高い読物であった。その内容はすっかり忘れてしまったが、それを読んだときに身に沁みた平和で美しいフランスの田舎の雰囲気だけが今でもそっくり心に残っているようである。

「やみじるかい闇汁会」や「ゆみそかい柚味噌會」の奇抜な記事などもなかなか面白いものであった。これなども具体的内容は覚えていないが、この記事で窺われた当時の根岸子規庵の気分と云ったようなものだけははつきり思い出すことが出来る。

その頃すでに読者から日記や短文の募集をしていた。自分も時に応募していたが、自分の書いた文章が活字になったのは多分それが最初であったと思う。理科大学の二年生で西にかたまち片町に家を持っていたその頃の日記の一節を「牛頓日記」と名づけて出したことがある。牛頓はニュートンと読むのであるが実に妙な名前をつけたものだと思う。もともと二年生のとき牛頓祭という理科大学学生年中行事の幹事をさせられたので、それが頭にあつたためかもしれない。また、短文の方は例えば「赤」とか「旅」とかいう題を出して、それにちなんだ十行か二十行くらいの文章を書かせるのであった。何という題であつたか忘れた

が、自分が九歳の頃東海道を人力車で西下したときに、自分の乗っていた車の車夫がひのき櫛笠がさを冠かぶっていて、その影が地上に印しながら走って行くのをしいたけ椎茸しいたけのようだと感じた。見えてその車夫を椎茸と命名したという話を書いた。子規がその後時々自分に「あの椎茸のようなのもつとないかね」と云ったことを思い出す。あの頃の短文のようなものなども、後に『ホトトギス』の専売になった「写生文」と称するものの胚芽はいがの一つとして見ることも出来はしないかという気がする。少なくとも自分だけの場合について考えると、ずっと後に『ホトトギス』に書いた小品文などは、この頃の日記や短文の延長に過ぎないと思われる。

裏絵や凶案の募集もあつて数回応募した。最初に軒端まわりどころの廻燈籠あおぎりと梧桐あおぎりに天の河を配した裏絵を出したら幸運にそれが当選した。その次に七夕棚たなばただなかなんかを出したら今度は見事に落選した。その後子規に会ったとき「あれはまずい、前のと別人のようだと不折が云っていた」と云われた。その後冬木立の逆さかさま様に映った水面の絵を出したらそれは入選したが「あれはあまり凝り過こぎてると碧梧桐へきごとうが云ったよ」という注意を受けた。

やはりその頃であつたと思うが、子規が熟柿を写生した絵を虚子きよこが見て「馬の肛門かと思つた」と云つた。それを子規がひどく面白がつて「しかし本当にそう思つたんだから」

ということを繰返し繰返し言い訳のように云うのであった。

募集した絵をゆつくり一枚一枚点検しながら、不折や虚子や碧梧桐を相手に色々批評したり、また同時に自分の描いておいた絵を見せたりして閑談に耽るのがあの頃の子規の一つの楽しみであつたらうということも想像される。

ともかくもあの頃の『ホトトギス』には何となしに活々とした創成の喜びと云つたようなものが溢れこぼれていたような気がするのであるが、それは半分は読者の自分がまだ若かつたためかもしれない。しかしそうばかりでもないかもしれない。食物に譬えれば栄養価は乏しくても豊富なるビタミンを含有していた。そうして他にはこれに代わるべき御馳走はほとんどなかった。それが、大正昭和と俳句隆盛時代の経過するうちに、栄養に富んだ食物も増し料理法も進歩したことはたしかであるが同時にビタミンの含有比率が減つて来て、缶詰料理やいかもの喰いの趣味も発達し、その結果敗血症の流行を来したと云つたような傾向がないとも限らない。

こうした輪廻サイクルの道程がもう一步進んで墮落と廢頹の極に達し俳句が再び「宗匠」と「床屋」の占有物となる時代が来ると、そこではじめて次の輪廻の第一歩が始まるのではないかという気もする。その前にはどうしても一度行きつくところまで行く必要があるで

あろう。

事によると明治維新後の俳句の真の黄金時代はかえって明治三十年代にあったのではないかという気もするのである。もちろんこれは自分等の年輩のもの自分勝手な見方ではあろうが、こうした見方もあるいは現代の俳人に多少の参考にはなるかもしれないと思うので思い出話のついでに拙ない世迷言よまいごとを並べてみた次第である。

（昭和九年九月『俳句研究』）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第五巻」岩波書店

1985（昭和60）年12月5日第2刷発行

初出：「俳句研究 第一巻第七号」

1934（昭和9）年9月1日発行

※初出時の表題は「明治卅二年頃」です。

※初出時の署名は「寺田寅日子」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明治三十二年頃

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>